

日本死の臨床研究会第32回年次大会： テーマ「この別れ　かの再会　その文化」

（札幌市コンベンションセンター，2008年10月4日（土），5日（日））

宮　坂　万喜弘

日本死の臨床研究会は1977年に創立されて、現在会員は2,400人。終末期の患者と家族に真の援助の道を準備すべく、全人的立場で研究していくことを目的に毎年全国大会を開いている。今年は札幌市の札幌コンベンションセンターで開催された。

会議の概要

今年の大会第32回大会は大会長の挨拶の後、プログラムにそって大ホールでの民族宗教学者の千歳栄氏による基調講演からはじめられた。

第一日目は1.「スピリチュアルケア」田村恵子氏（淀川キリスト教病院・ホスピス・主任看護課長）2.「看取りの文化」新村拓氏（北里大学）3.「地域に広がるホスピスケア——ケアタウン小平の取り組みから」山崎章郎氏（ケアタウン小平クリニック・院長）4.「末期がん患者と家族の関わり」沼野尚美氏（六甲病院・緩和ケア病棟・チャプレン・カウンセラー）5.「死の臨床と医学的リハビリテーション」安部能成氏（千葉県ガンセンター整形外科上席専門員）が講演し、二日目は「風に立つライオンの目指すこと——良医を育てるシステム作り——」や「日本宗教師と死の臨床」，「悲嘆者を理解する文化へ」，「パネルディスカッションの地域連携・在宅ホスピス」，「介護施設でのホスピスケア」が8つの会場で同時並行的に行なわれた。

それぞれテーマに沿って行なわれたが、特に印

象に残った講演は、千歳栄氏の1日目と2日目に渡って発表された、日本文化の基盤にあるものについての「山形精神文化考——曼荼羅の花——」山形の風土論の立場からの講演と映像の紹介であった。概要は生命あるものは必ず死を迎える。古来から日本人とっても死は最大の苦であり、関心事であった。古代からの先人達がこの死に対してどのように考え、叡智を働かせ、その恐怖や苦痛をどう越えようとし、次の世代に引き継いでよかったか。山形の民族信仰や習俗が伝承されている精神文化を1、樹霊供養の草木塔2、生者と死者の靈魂の里山での交流を伝えてきた端山侵攻3、出羽三山の奥の院の神仏習合湯殿信仰に象徴的に現れていることを紹介したものであった。現代科学文明は現象を細分化することによって真理に迫る手法を用いてきているが、この科学文明は物質的対象に対する手段としては正しい方法かもしれない。しかし視覚で捉えられない精神的な対象・靈的分野での真理的なものに対しては全面的に有効であるというわけではないのではないか。それと対照的に、総合化する中から察知・把握できるものが無意識で左右される真理や心情の世界にあると思われる。信仰、靈魂、靈性と昔から日本人にかかわりの深い人間の死との関係を日本古代からの伝統的立場で考えれば、日本は死の世界を生む世界との兼ね合いで考えてきた民族だとのことがよく観えてくる。日本では古来、宗教や信仰の世界において、総合化することによって生きるためへの生活の心構えを磨き、叡智を生み、育て

きたと考えられる。密教の曼荼羅の思想はそれをきわめて象徴的によくあらわしているのではなかったかとの講演と説明が、「生死曼荼羅のこと」と題されて行なわれた。共同体の人々の日常生活に根ざした宗教行事の意味と、精神的安心感の根源にある自然との対話の深いつながりを重く考えさせられる発表であった。

次に今日の病院の現状を「地域で生老病死を診る——命の音に導かれて——」と題して高齢の方南見病院長・方南見康雄氏の特別講演がされた。森羅万象に霊の存在を認める考え方はアニミズムといわれる。東洋思想や神道・仏教に深く根を下ろす世界観である。輪廻転生ともいわれる思想であるが、西欧思想的な自然科学の認識ではこのアニミズムの立場は異端視される。しかしこうした西欧的な志向から由来した行動の結果、自然破壊や水俣病などの悲劇が起こってきってしまった。近代以来の戦争被害の拡大もそうである。人間とそれ以外の存在を一元論で峻別する考えは危ういのではないか。アニミズムは古代以来の人間の心の深層に根付いている心性であるはずである。古代ギリシャ哲学でもアニマ（靈魂）の偏在が語られ、哲学者のティリッヒも「神は細部に宿り給う」と語っている。生命もとの世界に偏在する思想としてアニミズムを新しい光の下で見直すことが大切であろう。「一寸の虫にも五分の魂」といわれる。私達の日々の生活のあり方を、生命の自然との響きの中で捉える事により、死生観の再構築がされるのではないかと指摘がされた。最後に涙の音は小さく繊細な音だ。小さな音の究極には沈黙がある。沈黙にも無数の小さな音が潜んでいる。たまには沈黙と静寂の中に己を沈潜させ、自分自身の中に潜む小さな悲しみや嘆き、あるいは猫などの声に耳を澄ます事も必要ではないか。やがてはそれが他者の流す涙の音、悲しみや痛みの声への共感をおのずと培うことになるだろう…。やはり、静寂そして沈黙を大切にしておきたい。自分の死を準備するためにも大切なことなのだろうという。老齢の病院長のこの講演は深く心に残った。

第二日目は「風に立つライオンの目指すこと——良医を育てるシステム作り——」と題して鹿児島県堂園メヂカルハウス院長の堂園晴彦氏の教育講演で始まった。今の医療現場は技術的な面や最先端医療が優先され、医療の原点である患者さんに対する「優しさ」の伴う医療を教える臨床教育の場が持ちにくい。また医療現場の多忙さから患者さんを前にして手本になるような交流を研修医に教える時間すら持てないのが現実の状況である。堂園氏は鹿児島で既に1991年以来在宅ホスピスを手がけ、300名の終末期患者を看取り、4割の患者さんが在宅。その後ホスピスと通院施設を一つにした新たなホスピスを始めた。

この基盤となった指針が2000年12月の年末8日間訪問して体験したインドカルカッタでのマザーテレサのニルマル・ヒルダイ「死を待つ人の家」でのボランティア体験であったという。あえて便利なものを排除し、ほとんどの作業が手作業で行なわれているマザー・テレサの活動の実態は、それを手作業でする人に与える満足感や達成感、また幸福感をマザー・テレサが知り尽くしていたからではなかったか。そこで働く若いシスター達には自分がそれまで実行し、実感してきたことを教えたかったのではないかと堂園氏は語っていた。We can do no great thing, only small thing with great love. この言葉の語られる現場の日々を実体験した後に「マザーテレサ教徒」となった氏は、日本の現状に「日本は何か大切なところで道を間違えたようだ。国を変える力はないが、医療の道の修正に少しでも役立てれば」と今年も3月20日から10日間医学生とインド研修にボランティアとして出かけていった事が語られ、その時の映像が発表と共に上映された。

更に一般演題（ポスター）討論A[患者のケア], B[ホスピス緩和ケア病棟][在宅], C[疼痛緩和, それ以外の症状緩和, 精神症状の緩和], D[コミュニケーション, スピリチュアルケア], E[チームアプローチ, 緩和ケアチーム, 訪問看護]や死への準備教育, 生命倫理・哲学, 宗教, 死生観, などのポスター展示と討論が広い展示会場のあらゆる場所でもたれた。いくつもの教育講

演やパネルディスカッション、シンポジウムや事例検討、ミニ・ワークショップが同時並行で行なわれ、次に「この別れ かの再開 その文化」のテーマに即した鼎談を僧侶の打本顕真氏、アイヌ学者の藤村久和氏、作家の柳田邦男氏、司会の柏木哲夫氏がされて二日間の大会は締めくくられた。

日本のターミナルケアはまだ多くの難問を抱えている。その原因は根本的に医療に関わってきた専門家達の養成教育、並びに卒後の教育（新しい情勢を常に研修していく講習などへの取り組み不足）であったことが、反省点として指摘されている現実があった。こうした情勢を踏まえて、毎年総会が開かれ、会報を通じて情報を伝達し、各専門家委員会活動と教育の推進のための提案や検討がされ、セミナーの開催などが催されてきた。

それゆえ次第にはあるが、わが国の終末期ケア——（ホスピス・緩和ケア）は質的に漸次発展・向上してきてはいる。現在の医療政策の変化に伴い「死の看取り」の場が、病院から在宅、介護施設、グループ・ホームに拡大してきている。特に都市生活の核家族化と高齢者などの患者が増えてきている現状で、親しいものの死を地域文化とは隔絶した医療環境の中で迎えることが当たり前の

ようになってきたのが最近のわが国の現象である。これは「死の看取り」が“人の日常生活の実感として捉えられない”という現実感覚を生み出している。

これまでの「死の準備」から「受け止め方」、そしてその後の「残された者」の「心への配慮」など伝統的な地域に根ざした生活の大切な感情、共同体に対する意識や価値観がこの意味で失われ、相互理解の姿勢に大きく影響を与え始めている。ホスピス・緩和ケアが地域社会に広まる今後を先取りし、「死の看取り」分化の再構築、あるいは新たな視点の構築が必要なはずである。本年は「この別れ かの再開 その文化」をテーマとして、死に逝く人、残される家族、愛する人、地域の知人など、「死の看取り」についての先人達の育んできた英知・分化・風土を再度学びなおすことを課題に、叡智・分化・風土を前提とした「死から生を照射する」事が掲げられた。高齢化社会への伝統的な心の配慮を基盤とすれば、これから一層多様な試みが期待できるとの思いが強く感じられた。最後に主催者の発表で参加者は1,800人であったと報告された。まだ少し紅葉が散見される北海道の札幌の秋の季節は始まったばかり、晴天に恵まれた会議の二日間であった。